

カルムイク語 хальмг келн (xal'məg kelən),
英 Kalmuck, Kalmyk, 露 калмыцкий язык

ソ連邦カスピ海北岸のカルムイク自治共和国に行なわれるモンゴル語系の言語。

ソ連邦内のカルムイク人は、1979年の統計で、総計146,631人で、このうちの91.3%がカルムイク語を母語としている。カルムイク自治共和国内のカルムイク人は12万2千人で、同共和国の全人口の約40%にあたる。

カルムイク人は、元来、西部モンゴル系のオイラト族(Oirat)に属し、1630年代に天山山脈北方の^{ジュンガル}准噶爾盆地(ジュンガリア Jungaria)からボルガ川流域に大挙移動してきたトルグート(toryūd)部の後裔である。ボルガ河畔のトルグート族は、1771年、再度、ジュンガリアに向けて大移動を行なったが、その際に、ボルガ川の氷解のため右岸にとり残された集団がすなわち、カルムイクである。ソビエト政権のもとで、1920年に自治区、35年に自治共和国となったが、第2次大戦中にナチス・ドイツに協力したかどで、自治共和国は1943年に廃止され、住民も中央アジアやシベリアに分散移住させられたという。その後、1957年に自治区として再建されて住民の帰還が可能となり、翌58年には自治共和国となり、今日に至っている。

カルムイク族は伝統的に仏教(ラマ教)を信仰してきた。なお、キルギス共和国のイシク・クル(Иссык-Куль)湖の近くには、サルト・カルムイク(Sart-Kalmuck)とよばれるイスラム化した数千人のカルムイク人が住んでいるというが、詳細は明らかでない。

モンゴル語系の諸言語の中で、カルムイク語ともっとも近い関係にあるのは、中国の新疆ウイグル自治区、青海省、甘粛省およびモンゴル人民共和国西部のホブド、オブス両アイマク(Ховд аймаг, Увс аймаг; アイマクは、州、県にあたる行政単位)を中心に分布するオイラト諸方言である。これら諸方言の言語的差異はわずかであり、まとめて「オイラト語」とよぶことがある。これらは、モンゴル人民共和国の(ハルハ)モンゴル語や中国内蒙古自治区の内モンゴル語とも比較的近い関係にあり、互いの言語での相互理解も困難ではない。

[文字] 17世紀中葉まで、オイラト・モンゴル族の間では、他のモンゴル族と同様、書き言葉として、伝統的な縦書きの蒙古文語が用いられていたが、1648年

に仏僧ザヤ・パンディタ(Zaya-Paṇḍita)が蒙古字を改良したトド文字を考案して後、この文字で表記するオイラト文語が広まり、今世紀まで用いられてきた(中国、新疆ウイグル自治区のオイラト族の間では、現在も、このオイラト文語が使用されている)。

ソ連邦のカルムイクでは、1924年にロシア字に基づいた書き言葉を定めたが、ソ連邦諸民族のラテン字化運動の高揚の中で、1931年にラテン字(ローマ字)正書法に移行し、運動の転換とともに、1937年には再びロシア字に基づく正書法にもどった。

現在のカルムイク語アルファベットは、ロシア字のすべてにə, h, ж, н, ө, үの6文字を加えた39文字である。アルファベットの一覧に、それぞれの代表的な音価を付したものが表1である(カッコ内の音は、もっぱら外来語に現われる)。

〈表1〉 アルファベットとその音価

А а	a	Й й	j	У у	ü
Ө ө	ä	К к	k	Ф ф	(f)
Б б	b	Л л	l	Х х	x
В в	w	М м	m	Ц ц	ts
Г г	g	Н н	n	Ч ч	tš
Һ һ	ɣ	Ң н	ŋ	Ш ш	š
Д д	d	О о	o	Щ ш	(štš)
Е е	e	Ө ө	ö	Ъ ъ	
Ё ё	(jo)	П п	p	Ы ы	i
Ж ж	(ž)	Р р	r	Ь ь	
Жж	dž	С с	s	Э э	e
З з	z	Т т	t	Ю ю	ju
И и	i	У у	u	Я я	ja

正書法上の特異点としては、第2音節以降の短母音(弱化母音)をいっさい表記しないで、第2音節以降の長母音を母音字1字で表記しているのが目立つ。つまり、第1音節の長母音は同じ母音字を2つ重ねて表わすが、第2音節以降の長母音は母音字1つで表わされる。

例) көдлмш [kədəlmə] 「仕事」、баатр [ba:tr] 「勇士」、улан [ula:n] 「赤い」、барун [baru:n] 「右の」

[音声的特徴] カルムイク語で特に目立った音声的特徴は、第2音節以降に現われる母音の弱化が著しいことである。特に短母音に関しては、語の第1音節に現われるものは明瞭に発音され、互いにはっきり区別されるが、第2音節以降の短母音は短く、弛緩した状態で発音され、中舌母音化している。これは、語の第1音節に、常に強勢がおかれることと関連している。

第1音節に現われる短母音は、i, e, ä, a, o, u, ö, üの8種で、ä, ü, öは、IPAでそれぞれ[æ, y, ø]に相当する。それらの調音的位置関係は、次のよう

になる。

	(前舌)		(後舌)	
	非円唇	円唇	非円唇	円唇
狭	i	ü		u
中	e	ö		o
広	ä		a	

第2音節以降の短母音はəで表わすが、第1音節に後舌母音があるときは若干後寄りに、また第1音節に前舌母音があるときは若干前寄りに発音される (IPAでは、[e~ə])。第2音節以降の短母音は、質的、量的に弱化的程度が著しいが、その現われる位置は比較的安定しており、音節構造が根本的に改編されたわけではない。

長母音には、短母音のそれぞれに対応する i, ē, ā, ā, ō, ū, ö, ü の8つがある。このうち、ē, ō, ö は第1音節にのみ現われ、第2音節以降には現われない。円唇母音 ō, ö が第2音節以降に現われないことは、前進的円唇化の欠如として、カルムイク語の目立った音声的特徴のひとつである。

ハルハ・ モンゴル語	カルムイク語	
borō	borān	「雨」
xörō	körä	「鋸」

また、カルムイク語には二重母音がなく、他のモンゴル系諸言語の二重母音に対して、次のように長母音が対応している。

ハルハ・ モンゴル語	カルムイク語	
naēm	nāmən	「8」
noxoē	noxā	「犬」
üil	ūle	「行為」

子音は、p, t, t' k; b, d, d', g; m, n, n', ŋ; l, l'; r; w, j; (f), s, š, x; z, (ž), y; ts, tš; dž からなる (カッコ内の音は、もっぱらロシア語からの借用語に用いられる)。š, ž, tš, dž は、IPA の表記では、それぞれ [ʃ, ʒ(~z), tʃ, dʒ] にあたり、t', d', n', l' は口蓋化子音で、IPA では、[t̚, d̚, ŋ̚, l̚] である。また、x, y は口蓋垂音で、IPA では、それぞれ [χ, ʁ] である。

子音の調音様式と調音点による分類は、次のとおりである。

	唇音	歯 茎・ 口蓋音	口 蓋化音	軟 口蓋音	口 蓋垂音
閉鎖音	無声	p	t	t'	k
	有声	b	d	d'	g

破擦音	無声	ts	tš		
	有声		dž		
摩擦音	無声	(f)	s	š	x
	有声	w	z(ž)	j	ɣ
側面音		l	l'		
ふるえ音		r			
鼻音		m	n	n'	ŋ

両唇音の b は、語中、語末では、子音 m の直後に位置する場合を除いて、摩擦音として現われ、無声子音の前では [β], それ以外の位置では [β] となる。

例) šobūn [ʃoβu:n]「鳥」、keb [keβ]「型」、dabsən [daβsən]「塩」、等。

母音調和があり、母音は後舌母音 (a, o, u) と前舌母音 (e, ö, ü, ä, i) の2系列に大別される (長母音も同様)。第2音節以降に現われる長母音は、第1音節の母音の種類によって、表2のような生起の制限を受ける。

<表2> 母音調和

	第1音節 の母音	第2音節以降の長母音	
後舌母音	a ā o ō u ū	ā ū	
前舌母音	e ē ö ö ü ü ä ä i ī	ä ü	ī

これは接尾辞にまで及び、造語的、文法的接尾辞のうちには、ā~ā および ū~ū の母音交替による異形態をもつものが多い。

例)

yol	「川」	yol-mūd-ās	「川 (pl.) から」 (複数)(奪格)
ükər	「牛」	ükər-mūd-ās	「牛 (pl.) から」 (複数)(奪格)
or-	「入る」	or-ād	「入って(から)」
ir-	「来る」	ir-ād	「来て(から)」

以下、母音調和による ā~ā, および ū~ū の交替を、ā², ū² のように表わす。

【文法・形態】 語形変化は、造語的 (派生的) なものも、文法的なものも、基本的には語幹に種々の接尾辞がつくことによって実現される。人称・指示代名詞を除いて、語形変化に際して語幹が交替することはまれであるが、語幹末の短母音や「不定の n」が脱落することがある。文法的語形変化は、名詞類の曲用と動詞類の活用に分けられる。

名詞の曲用には、1) 数, 2) 格, 3) 所属, の3種

類があり、それぞれ次のような語尾によって表わされる。

1) 複数語尾: -s, -d, -ūd², -mūd², -nər.

-s は母音で終わる語幹に; -d は n で終わる語幹でその n をとった形に; -ūd² は g, k に終わる語幹に; -mūd² は子音 l, r, s, n, および、若干の短母音に終わる語幹につく。-nər は語幹末の音にかかわりなく、人間、神等を表わす名詞につく。

例) āyə 「椀」—āyə-s, noxā 「犬」—noxā-s; odən 「星」—odəd, mörən 「馬」—mörəd; zurəg 「絵」—zurəg-ūd, kerəg 「仕事」—kerəg-ūd; džil 「年」—džil-mūd, yazər 「土地」—yazər-mūd; bagšə 「先生」—bagšə-nər, ax 「兄」—ax-nər.

複数を表わす数詞や数量詞が名詞を修飾する場合、修飾される名詞は複数語尾をとらない。

2) 格語尾 格の種類と語尾、主要な意味は、表3のとおりである。

子音 n に終わる語の中には、格変化に際して、一部の格で語幹末の n が脱落する。これが、いわゆる「不定の n」である。「不定の n」が脱落するのは、対格、造格、および共同格である(表3の例2)。

主格形には、「不定の n」をもった形が現われる。

属格形は、語尾の種類がもっとも多い。そのうち、-in は n, ŋ 以外の子音および弱母音に終わる語幹に、-n は2音節以上で長母音に終わる語幹に、-ā² は子音 n に終わる語幹につく。さらに、子音 ŋ に終わる語幹には -gīn が、単音節で長母音に終わる語幹には -yīn がつく。

対格形では、語尾 -ig は子音および弱母音に終わる語幹に、-g は二重母音に終わる語幹につけられる。対格形には、上の語尾をともなった形のほかに、語幹形(「不定の n」をもたない形)がそのまま用いられることがある(これを「不定格」とよぶ)。

与位格形語尾のうち、-tə は子音 r, g, s, d に終わる語幹に、-də はそれ以外の語幹につく。

一般に、弱母音に終わる語幹に長母音で始まる接尾辞がつく際、語幹末の弱母音は脱落し、長母音に終わる語幹に長母音で始まる接尾辞がつく場合には、語幹と接尾辞の間につなぎの子音 -y- が挿入される。表4は、弱母音および長母音に終わる語幹の格変化の例である。

〈表4〉 弱母音、長母音に終わる語の格変化

主格	axə 「兄が」	dū 「弟が」
属格	ax-in 「兄の」	dū-gin 「弟の」
対格	ax-ig 「兄を」	dū-g 「弟を」
与位格	axə-də 「兄に」	dū-də 「弟に」
奪格	ax-ās 「兄から」	dū-yās 「弟から」
造格	ax-ār 「兄をして」	dū-yār 「弟で」
連帯格	axə-lā 「兄と」	dū-lā 「弟と」
共同格	axə-tā 「兄をつれて」	dū-tā 「弟をつれて」
方向格	ax-ūr 「兄の方へ」	dū-yūr 「弟の方へ」

3) 所属語尾には、a) 再帰所属語尾と、b) 人称所属語尾の2種類がある。

a) 再帰所属語尾: -ān², -ən, -rən.

再帰所属は、文の主語に対する所属・所有関係を表わし、多くの場合、「自分の～」と訳しうる。上記の語尾のうち、-ən は奪格・造格・方向格形に、-rən は連帯格形に、-ān² はその他の格形につく。対格形では、語幹形(「不定の n」をもたない形)に -ān² がつく。-ān² がつく際、語幹末の弱母音は脱落し、長母音との間につなぎの子音 -y- が入る点は、格語尾の場合と同様である。

例) ax-in-ān 「自分の兄の」、ax-ān 「自分の兄を」、axə-d-ān 「自分の兄に」、ax-ās-ən 「自分の兄から」、ax-ār-ən 「自分の兄をして」、axə-lā-rən 「自分の兄と」、axə-tā-yān 「自分の兄をつれて」、ax-ūr-ən 「自分の兄の方へ」

b) 人称所属語尾は、「私の」「君の」「彼の」等、人称代名詞の属格形と同様の意味を、語尾によって表わす。語尾の種類と形は、次のとおりである。

〈表3〉 格変化一覧

名称	語尾	代表的な意味	例1	例2
主格	-∅(ゼロ)	～が、～は	yal 「火が」	mören 「馬が」
属格	-in, -n, -ā ²	～の	yal-in 「火の」	mören-ā 「馬の」
対格	-ig, -g	～を	yal-ig 「火を」	mör-ig 「馬を」
与位格	-də, -tə	～に、～で(場所)	yal-də 「火に」	mören-də 「馬に」
奪格	-ās ²	～から、～より	yal-ās 「火から」	mören-ās 「馬から」
造格	-ār ²	～で(手段)	yal-ār 「火で」	mör-ār 「馬で」
連帯格	-lā ²	～と(ともに)	yal-lā 「火と」	mören-lā 「馬と」
共同格	-tā ²	～をもって	yal-tā 「火をもって」	möre-tā 「馬をつれて」
方向格	-ūr ²	～に向かって	yal-ūr 「火の方へ」	mören-ūr 「馬の方へ」

	単 数	複 数
第1人称	-(ə)m ~ -mə	-(ə)mdən
第2人称	-tšən	-tən
第3人称	-(ə)n'	

(カッコ内の弱化母音は、子音で終わる語幹につく場合に現われる)

格変化形に人称語尾が接尾する際に、次のような変化がみられる。

ア)「不定の n」をもつ名詞の主格形では、第1人称、第3人称の人称所属語尾は、n をもたない語幹につく。

例) mörən「馬が」——mörə-m「私の馬が」

イ) 属格形では、語尾 -ā³ のあとで、-tšən, -tən の前に子音 n がつく。

例) temān-ā「ラクダの」——temān-ā-n-tšən「君のラクダの」

また、属格形語尾 -in は、第1人称の所属語尾の前では -im となる。

例) ger-in「家の」——ger-im-mə「私の家の」

ウ) 対格形に人称所属語尾がつく時、対格語尾の -ig は -i となり、また、-g は -gi となる。

例: ger-ig「家を」——ger-i-m「私の家を」

noxā-g「犬を」——noxā-gi-tšin「君の犬を」

複数語尾、格語尾、所属語尾は、この順序で名詞に接尾する。

例) axə-nər -lā -m 「私の兄たちと」
兄 複数 連帯格 人称所属

代名詞、数詞も、名詞と同様の曲用をする。

代名詞では、格変化に際して、第1人称と第2人称の単数形で、次のような語幹の交替がみられる。

	第1人称 単数	第2人称 単数(親称)	第2人称 単数(尊称)
主格形	bi	tši	ta
属格形	mini	tšini	} tan-
対格形	namāg	tšamāg	
その他の格 の語幹形	nan-	tšam-	

第1人称の複数では、主格形にのみ包括形 (inclusive) と 排除形 (exclusive) の区別がある。第2人称の複数には、tadən と tānər の2つの系列がある。

	第1人称複数 (排除形)	第2人称複数 (包括形)
主格形	bidən	madən tadən ~tānər
斜格形語幹	man-	tadən- ~tānər-

第3人称の人称代名詞にあたる特別な形態はなく、これには、次に述べる指示代名詞が用いられる。

指示代名詞には、話し手に近いものをさす近称と、話し手から遠いものをさす遠称の2つの系列があり、それぞれの主格形と斜格形語幹は次のようになる。

	(単 数)		(複 数)	
	近 称	遠 称	近 称	遠 称
主格形	enə	terə	edən	tedən
斜格形 語 幹	{ enün- ~ün-	{ terün- ~tün-	edən-	tedən-

(単数斜格形語幹末の n は「不定の n」)

基本数詞は、次のとおりである。

「1」 negən, 「2」 xojer, 「3」 yurbən, 「4」 dörbən, 「5」 tabən, 「6」 zuryān, 「7」 dolān, 「8」 nāmən, 「9」 jisən, 「10」 arbən, 「20」 xörən, 「30」 yutšən, 「40」 dötšən, 「50」 tābən, 「60」 džirən, 「70」 dalən, 「80」 najən, 「90」 jirən, 「100」 zün, 「1,000」 miqyən, 「1万」 түмән, 「10万」 bumə, 「100万」 saje

数詞語幹末の子音 n は、すべて「不定の n」である。

合成数詞は、桁の大きい順に並べてつくる。

例) dolān miqyən tabən zün dötšən jisən
七 千 五 百 四 十 九

動詞の活用形は、その意味と機能により、1) 命令形、2) 終止形、3) 形動詞形、4) 副動詞形の4類に分けられる。

命令形としてまとめた一連の活用語尾は、第2人称に対する命令や依頼だけでなく、第1人称の意志や、第3人称が行為を遂行することに対する容認、さらに、人称に関係なくその行為が行なわれることに対する懸念等を表わすものも含む。いずれも文の述語となり、その直前に、副詞 bitšā, bitškā をおいて、禁止、否定の意味を表わす。

終止形は、言い切りの形で、文の述語となる。時制を表わし、述語人称語尾をとる。

形動詞形は、名詞を修飾する形容詞的なはたらきと、「~する(した)こと」等の意味で曲用変化する名詞的なはたらきを合わせもつほか、繋辞の意味をもつ補助動詞とともに文の述語となる。このほか、補助動詞を伴わずに単独で文の述語となり、終止形と同様に用いられることがある。形動詞形の前に es をおくか、後に -ugā をつけることにより、否定の意味を表わす。

副動詞形は、動詞を修飾する副詞的なはたらきをもつ。また、等位節の述語となって文を中止したり、従属節の述語となって主文に連なる機能をもつ。否定には、副動詞形の直前に es をおく。

それぞれの活用形の語尾の種類と形、および、その代表的な意味は、次のとおりである(カッコ内の y は、長母音で終わる語幹につく際に現われる。それ以外のカッコ内の音形は、任意に現われる)。

1) 命令形

種類	語尾	例
第2人称 の行為	命令 -φ(ゼロ) <i>irə</i>	「来い」
	依頼 -tən	<i>irə-tən</i> 「来て下さい」
第1人称 の行為	意志・ <i>-ij</i> 注)	<i>ir-ij</i> 「来よう, 来ましょう」
	勧誘	
	意向 -sā ²	<i>irə-sā</i> 「来ようか(な)」
第3人称 の行為	希望 -txā ²	<i>irə-txā</i> 「来るように」
	容認 -g	<i>irə-g</i> 「来るにまかせよ」
	懸念 -bzā ²	<i>irə-bzā</i> 「来はしまいか」

(注:長母音で終わる語幹には, -j がつく)

2) 終止形

種類	語尾	例
現在	-nā ²	<i>irə-nā</i> 「来ます」
近過去	-b	<i>irə-b</i> 「来た」
体験過去	-lā ²	<i>irə-lā</i> 「来た」
伝聞過去	-džə注)	<i>irə-džə</i> 「来た(そうな)」
未来	-xə	<i>irə-xə</i> 「来ます」

(注: l 以外の子音に終わる語幹には, -tšə がつく)

3) 形動詞形

種類	語尾	例
完了	-sən	<i>irə-sən</i> 「来た(～)」
継続	-(y)ā ²	<i>ir-ā</i> 「来ている(～)」
習慣	-dəg	<i>irə-dəg</i> 「(よく)来る(～)」
予定	-xə	<i>irə-xə</i> 「来るはずの(～)」

4) 副動詞形

種類	語尾	例
連合	-n	<i>irə-n</i> 「来(て)～」
並列	-džə注)	<i>irə-džə</i> 「来て～」
分離	-(y)ād ²	<i>ir-ād</i> 「来て(から)～」
条件	{-bās(ə) ²	<i>irə-bās(ə)</i> 「来れば～」
	{-xlā ²	<i>irə-xlā</i> 「来れば～」
譲歩	-btšə(n)	<i>irə-btšə(n)</i> 「来ても～」
限界	-təl	<i>irə-təl</i> 「来るまで～」
即刻	-xlären ²	<i>irə-xlären</i> 「来るや(否や)～」
目的	-xār ²	<i>irə-xār</i> 「来るために～」

(注: l 以外の子音に終わる語幹には, -tšə がつく)

カルムイク語には, 述語につく人称語尾がある。これは, 述語となる動詞終止形, および, 実詞(名詞, 形容詞, 数詞)に接尾されて, それが接尾する述語の主語の人称と数を表わす。述語人称語尾の種類と形は, 次のとおりである(第3人称はない)。

	単数	複数
第1人称	-b	-bdən
第2人称	-tšə	-tə

例) *irə-nā-b* 「私は来ます」
irə-nā-bdən 「私たちは来ます」

irə-nā-tšə 「君は来ます」
irə-nā-tə 「君たちは来ます」
bi xal'məg-b 「私はカルムイク人です」
bagšə-nər-bdən 「私たちは教師です」

近過去終止形 -b に第1人称の述語人称語尾 -b がつくとき, 終止形語尾は -ū² となる。

例) *irə-b* 「来た」——*ir-ū-b* 「私は来た」
ir-ū-bdən 「私たちは来た」

動詞の態(voice)には, 使役, 受動, 共同, 相互, 衆動の5種類があり, 動詞語幹にそれぞれ次の接尾辞をつけて表わす。

a) 使役態: -ū², -lyə- (後者は, 長母音で終わる語幹につく)

bär- 「掴む」——*bär-ūl-* 「掴ませる」
bū- 「降りる」——*bū-lyə-* 「降ろす」

b) 受動態: -gdə-

bär- 「掴む」——*bäre-gdə-* 「掴まれる」

c) 共同態: -ltšə-

bär- 「掴む」——*bäre-ltšə-* 「掴み合う, 握手する」

d) 相互態: -ldə-

bär- 「掴む」——*bäre-ldə-* 「とっ組み合う」

e) 衆動態: -tsxā²-

bär- 「掴む」——*bäre-tsxā-* 「(大勢で)掴む」

[統 辞] 語順では, 従属的な語句がそれを受けける語句の前に位置するのが大原則である。その結果, 語順は, 日本語ときわめて類似している。

文は, 述語を中心に構成される。述語は, 文に不可欠の要素であるが, 主語, 目的語等は適宜省略されることがあり, それらは, 述語にかかる従属的な成分とみなしうる。これらの文成分の語順としては, 述語が常に最後に位置し, 主語, 目的語等, 述語にかかる文成分相互の語順は比較的自由である。中でも, 主語-目的語-述語の語順はもっとも一般的である。

述語動詞は, 補語を必要とするものと補語を必要としないものに2大別される。繫辞動詞 *bä-* 「～である」は, 補語を必要とする動詞の代表的なものであるが, その現在時制終止形 *bānā* は, 文中でしばしば省略される。その場合, 述語は, 補語となっている名詞, 形容詞等だけから構成される。

例)

axə-m suryūl'-in bagšə.

兄は(←私の) 学校 の教師です

enə üker sän.

この牛は 良い

enə degtər minī.

この本は 私のです

形容詞, 副詞等の修飾語は, それが修飾する語(被修飾語)の前におかれる。前置詞はなく, 後置詞を用

いる。

例)

maš sǎn üker

非常に 良い 牛

ikə xalün bol-

とても 暑く なる

dordžə noyān dēr kebtə-b.

ドルジ(人名)は 草の 上に 横たわった

terünā darū taldān kün ügə kelə-b.

彼の 後で 別の 人が話を した

関係詞はなく、従属文は、述語動詞の形動詞形や副動詞形、および、それらと接続詞、後置詞との結びつきによって主文と繋がる。

例)

suryül'tš bagš-in kel-s-ig soqsə-džānā.

生徒は 先生の 言ったことを 聞いている

(完了形動詞語尾 -sən に対格・造格語尾がつくと、

末尾の n は脱落する。また、-džānā² は、-džə

bānā「～ている」の縮約形)

tšamāg irəxlā, bi kinō-d

君が(対格) 来たら 私は 映画に

od-nā -b.

行きます (人称語尾)

xurə or-sən utšerār, bi kinō-d od-sən

雨が 降った ので 私は 映画に 行った

ugā -b.

(否定) (人称語尾) {行かなかった}

述語は、原則として文末におかれるが、さらに、次のような終助詞(語気助詞)は、述語に後置されて、否定、疑問、陳述等を表わす。これらは、先行する文全体を受けていると考えられる。

1) 否定: bišə, ugā (それぞれ、-š, -gō となることがある)

enə üker sǎn bišə.

この 牛は よく ない

xabrār ikə xalün bol-sən ugā.

春には 大変 暑く なった(否定){ならなかった}

2) 疑問: -j(～ij), -ū², -mb

terə ir-sən batā-j?

あそこに 来たのは バター(人名)かい?

saber ger-t-ān ir-n-ū?

サバル(人名)は 家に(←自分の)帰って来ますか?

mañyedür xurəg bol-xə-mb?

明日 会議が ありますか?

3) 陳述: mön (～mən), bižə

badmə endər ir-xə-mən.

バドマ(人名)は 今日 来るのです(確認)

tedən endər ir-xə-bižə.

彼らは 今日 来るでしょう(推断)

[語彙] カルムイク語の語彙では、他のオイラト諸方言と共通の固有の語彙と、ロシア語からの多数の借用語が特徴的である。

オイラト方言に共通な固有の語彙の例を次に示す。

カルムイク語		ハルハ・モンゴル語
ajū	「熊」	bābgaē
asxən	「晩」	üdüš, oroē
terəm	「壁」	xan
kiləg	「シャツ」	tsamts
xāsən	「鍋」	toGō
xarātšə	「包の天井の丸窓」	tōn

また、次のように特殊な音声的特徴を有する語も目立つ。

カルムイク語		ハルハ・モンゴル語
āyə	「椀」	ajāc
köbün	「息子」	xū
γosən	「靴」	gutūl
debəl	「モンゴル服」	dēl
kümən	「人(敬語)」	xūŋ
sō	「夜」	šön
gesən	「腹」	gedēs

ロシア語からの借用語には、次のようなものがある。
ustəg「干草の山」<стор, ārəm「軍隊」<ápmия,
ül'ənts「通り」<ýлица, pārt'「党」<пáртия,
kolxōz「コルホーズ」<колхóз, telfōn「電話」
<телефóн

[方言] カルムイク語内部における主要な方言は、トルグート(toryūd)とドルベト(dörbəd)であるが、両者の差異はわずかで、主に音声面と語彙面に関係している。主な違いを列挙すれば、

1) 蒙古文語の第2音節以降の -ayi-, -oyi-; -ai, -oi の連結に対して、トルグート方言では ā が、ドルベト方言では ā̄ が対応する。

蒙古文語形	トルグート方言	ドルベト方言	
dalaj	「海」	dalā	dalā̄
moγoj	「蛇」	moyā	moyā̄
arʃayi-	「歯をむく」	arzā-	arzā̄-
usutaj	「水のある」	ustā	ustā̄

2) 第1音節で、両唇音 b, m に先行する母音 *u, *ü が、ドルベト方言では o, ö として現われる。

トルグート方言	ドルベト方言
xubā-	xobā- 「分ける」
sübə	söbə 「小さい穴, すきま」
sümə	sömə 「寺」
numən	nomən 「弓」

なお、ドン(Дон)川流域のカルムイクをブザワ

(buzāb) とよび、独立の方言とすることがある。この方言は、上記1の特徴においてはトルグート方言と同じであるが、それ以外の点では、ドルベト方言と共通するところが多い。

形態的には、トルグート方言に特徴的なものとして、人称代名詞の第1人称複数形として *mansə~mānər*、第2人称複数形として *tansə~tānər* を用いる、方向格 *-ūr²* のかわりに *-ād²* という形を用いる、等がある。

現代カルムイク文章語は、基本的にはトルグート方言にもとづいているが、ドルベト方言の要素も含まれている。

【辞書】

Ramstedt, G. J. (1935, 1976²), *Kalmückisches Wörterbuch* (Lexica Societatis Fenno-ugricae III, Société Finno-ougrienne, Helsinki)

Муниев, Б. Д. (ответственный редактор) (1977), *Калмыцко-русский словарь* (Издательство «Русский язык», Москва)

Харькова, С. С. и Б. Э. Убушиева (1986), *Калмыцко-монгольско-русский словарь* (Калмыцкое книжное издательство, Элиста)

【参考文献】

Posch, Udo (1964), "Das kalmückische und verwandte Dialekte", *Handbuch der Orientalistik*, I Abt., V Band, II Abschnitt: *Mongolistik* (E. J. Brill, Leiden-Köln)

Ramstedt, G. J. (1976²), "Erklärungen zur kalmückischen laut- und formenlehre", *Kalmückisches Wörterbuch* (Société Finno-ougrienne, Helsinki; 初版 1935)

Бадмаев, Б. Б. (1966), *Грамматика калмыцкого языка. Морфология* (Калмыцкое книжное издательство, Элиста)

Илишкин, И. К. и Б. Д. Муниев (1977), "Краткий грамматический очерк калмыцкого языка", Б. Д. Муниев (ред.), *Калмыцко-русский словарь* (Издательство «Русский язык», Москва)

Котвич, Вл. Л. (1929²), *Опыт грамматики калмыцкого разговорного языка* (Калмыцкая комиссия культурных работников в Чехословацкой Республике, Прага)

Павлов, Д. А. (1983), *Фонетика современного калмыцкого языка* (Калмыцкое книжное издательство, Элиста)

Санжеев, Г. Д. (1940), *Грамматика калмыцкого языка* (Издательство АН СССР, Москва-Ленинград)

Тодаева, Б. Х. (1968), "Калмыцкий язык", *Языки*

народов СССР, т. V, *Монгольские, тунгуско-маньчжурские и палеоазиатские языки* (Издательство «Наука», Ленинград)

トド文字で表記される「オイラト文語」の文典、辞書については、「オイラト語」の参考文献を参照されたい。

【参照】 モンゴル諸語、オイラト語

(栗林 均)